



タマラ・ロホのオーロラ姫 イングリッシュ・ナショナル・バレエ『眠れる森の美女』Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

## 眠れる森の美女

タマラ・ロホ率いるイングリッシュ・ナショナル・バレエの、新シーズンが開幕しました。初日の様子をディアミッド・オーメアラがレポートします。

『眠れる森の美女』といえば、19世紀終盤の古典バレエ屈指の名作だ。これを開幕の演目にしたところに、来る一年に向けてのバレエ団の意気込みがうかがえるが、それが新芸術監督の就任の年の選択であり、しかも監督であり世界的スターでもあるタマラ・ロホ自らが主演するとなると、なおさらだ。

プロローグには主役は男女とも登場しないので、観客の関心を集めるのはもっぱら、生まれたばかりのオーロラ姫に贈り物をする妖精たちとなる。透明な泉の精を踊ったプリンシパル、フェルナンダ・オリビエラはヴァリエーションの随所で美しい造形を見せたが、ゆったりとしたテンポの曲にカリスマ性を吹き込むところまではいかなかった。魔法の庭の精のアデーラ・ラミレスは音楽と美しく戯れ、もっとも短いこのソロを遊び心に富みダイナミックな、印象深いものにしていった。森の空き地の精は、これまであまり目立つ役を与えられることのなかった群舞のジェム・チョイ。これまで聴いたこともない遅いテンポに合わせる

羽目になったが、心身ともによくコントロールして、平然と踊りぬいた。歌の鳥の精は、この場面で最も魅力を欠く踊りに見えることもままあるものだが、クリスタル・コスタの強く鋭いポワント・ワークや目に焼きつく最後の長いアラバスクは、見事だった。黄金のつる草の精は、クセニア・オヴシャニク。トップ・クラスのプリンシパルと呼ぶにふさわしい技量が、上体のしなやかさや、自然に湧きあがってくるようなジュテに結実していた。完璧なキャストニングの中でも際立っていたのは、ダリア・クリメントヴァの高貴なリラの精だ。ピルエットにはやや力任せなところもあったが、成熟と魅惑を感じさせ、見る者に感銘を与えるに十分だった。ジェイムズ・ストリーターのカラボスも適役で、エリザベスI世もどきの衣裳とかつらにもかかわらず、不吉な気配と明解なマイムを両立させていた。

第一幕ではいよいよ、成人を迎えたオーロラ姫が姿を見せる。その登場はあらゆる古典バレエの中でも最も心躍る場面であり、プティパとチャイコフスキーの完璧な調和でもある。だが今回のロホは、頬を上気させ好奇心に満ちた十代の少女というより、成熟と情熱のオーロラ姫だった。私は、この役は彼女には不向きだと思う。確かに直後のヴァリエーションでの回転は高度で、ローズ・アダージョでのバランスには生気がほとぼしり、喜びと音楽的な流れもあった。彼女のバランスは観客が待ちわびていたもので、彼女の名を知らしめてきたものでもあったが、ローズ・アダージョが本来表現すべきものは発見と成長で、なくもがなの超絶技巧ではないはずだ。

第二幕は、美しい幻影の場の前に狩猟と、ふざけた目隠し鬼の場面が立ちはだかっている。プリンシパルのブリジェット・ツェーは、伯爵夫人という小さな役には美しすぎたが、舞台上に切望されていたカリスマ性をもたらした。フロリムント王子役のワジム・ムンタギロフは、身体条件では比類がなく技術も完璧と言えるが、演技力不足。どの場面でも表情が同じで、演技力が物足りない。

第三幕の結婚式には、美しい部分もあればプティパとしては異色の振付(「赤ずきん」と「長靴を履いた猫」)もあるが、女性陣が素晴らしかった。銀のヴァリエーションを踊ったラミレスとコスタに、これも輝くばかりのナンシー・オズボールドストーンを加えた三人は、端正きまりない技術と豊かな存在感を示した。金のヴァリエーションは、下手をすると踊り手を不恰好に見せかねない振付だが、エステバン・ベルガンザはいつもどおり優雅だった。フロリナ王女の加瀬菜は、昨年のエマーシング・ダンサーズ・アワード受賞の際に感じさせた可能性をすべて現実のものとし、振付を完璧に体現していたといえる。その一方、青い鳥のローラン・リオタルドは加瀬の対等のパートナーとはゆかなかった。グラン・パ・ド・ドゥには極上の瞬間もあったのだが(逆に低調な部分が皆無だったのは喜ばしい)、総体的にはまずまず。アダージョはフォームは美しかったが、表現のきめ細かさが足りない。ムンタギロフはソロの技術は傑出していたが、トゥール・アン・ルールがいかに素晴らしくとも、それだけでよしとするわけにはいかない。ロホのヴァリエーションは堂々たるものだったが、引き上げが足りないため、最後は残念な出来に終わった。

可も不可もある公演だったが、ロホの資質(他の多くの役では成功の源になった)は、監督としてリーダーシップを発揮し、バレエ団のレベルを「世界が注目すべき、個性的で才能豊かなソリストとプリンシパルの宝庫」へと引き上げるのに役立つことだろう。(訳:長野由紀)